

男性保護司のケース体験記

学校連携の重要性

A君が初めて母親と来訪して来たのは、中学2年生の時。罪名・非行名は「傷害」であった。第一印象は、威圧感のある大柄な体形の割には、幼さと素直な性格を感じた。

面接時は、A君の明るさで会話に苦勞することなく多弁に詳細を語ってくれた。面接を重ねていくうち、A君の述べていることの何点かについて真偽を知りたいと思うようになった。事件の経緯や学校における日常の生活態度等が、A君の言葉の内容と保護観察事件調査票との整合性が取れないと感じたからであった。

学校にアポを取り、訪問すると校長、教頭先生が出迎えてくれ、早速情報交換をした。私が対象者から聞いていたこと、感じていたことと真逆の内容を聞かされ、A君の人となりが少し見えたような思いであった。

このことは、私の引き出しが増えたことにもなり、のちのA君との面接時における会話に大いにプラスになったことは言うまでもない。

その後、無事に中学を卒業。念願の県立高校に合格。気持ちも新たに新生活がスタートしたかと安堵してから間もなく、その年の暮れに教師、クラスメイトとのトラブルで退学。根本的な部分は改善されていなかったようだ。

現在は、保護観察が終了しているので、直近の状況は不明であるが、終了直前に「ボランティアをやりたい」と言って、自ら活動場所を探してきたことがあった。熱心に取り組んだ結果、関係者から大いに感謝されたこともあって、人から感謝されることの喜びに目覚めたようだった。通信制高校の後には、福祉系の専門学校に通いたいと希望していたので、実現できるように強く願うばかりである。